慶　應　義　塾　　ISSN 1349-6468

福澤研究センター通信

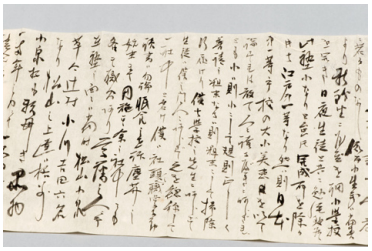
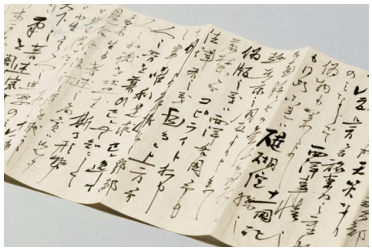
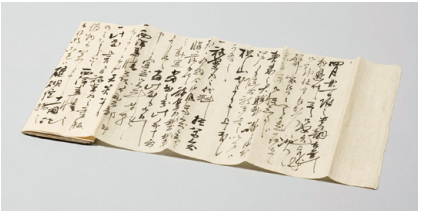
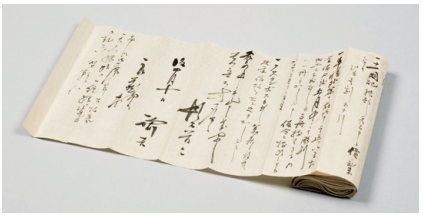
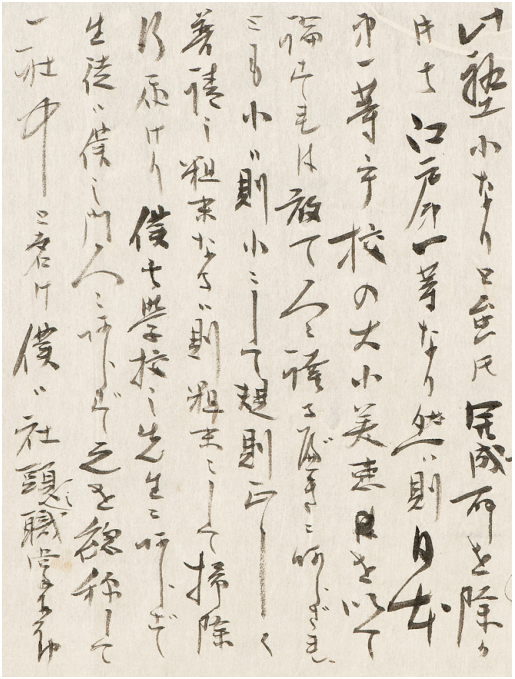
Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第９号　2008年10月１日 発行

目　次

＊これからの福沢研究センターに期待すること
安西　祐一郎…… 2
＊所長就任にあたって　米山　光儀…… 3
＊センター開設25年記念講演会…… 4
＊セミナー概要…… 7
＊小泉信三展…… 8
＊主な動き……10
＊福沢研究センター諸記録……11

「主な新収資料」は次号（10号）にまとめて掲載いたします。

縦 161mm × 横 2444mm

＊ 山口良蔵宛福沢諭吉書簡　慶応４年閏４月10日付 ＊

この書簡には、慶應義塾の基本となる精神がよく表われています。

福沢諭吉は慶応４(1868)年４月、10年間定まった名前のないまま続けていた塾に「慶應義塾」と命名しました。世の中は、幕府と朝廷を擁する政府による戊辰戦争の真っ直中でしたが、福沢は人材育成こそ急務であると考え、自らの塾を近代的学塾とするために、より一層の充実をはかります。書簡中の「この塾小なりといえども、開成所（＝幕府設立の洋学の研究教育機関）を除くときは江戸第一等なり。然ばすなわち日本第一等か」という言葉に、その強い自負が窺えます。そしてこの書簡には、慶應義塾は先生と門人といった上下関係で成り立つのではなく、集まった者たちが同志としてお互いに教え学びあう学塾である、すなわち「半学半教」の精神に依って成り立つという基本の理念が「僕は学校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず。これを総称して一社中と名づけ、僕は社頭の職掌相勤め、読書は勿論、眠食の世話、塵芥の始末まで周旋、その余の社中にも各々その職分あり」という一節に表われています。（p.9 に続く）

「これからの福沢研究センターに期待すること」

塾長　安西祐一郎（あんざい ゆういちろう）

福沢研究センターが開設25年を迎えましたことを心から慶ぶとともに、センターの活動をご支援いただいてきた皆様、センターの活動に関与してこられた方々に深く感謝申し上げたいと思います。

福沢研究センターは、1983年、塾史編纂所、塾史資料室の発展として慶應義塾創立125年の記念に開設された組織であり、福沢諭吉や慶應義塾に関する資料収集や調査等に留まらず、福沢の思想や業績の研究と普及等、またそれらを視野に置きながらも広く近代日本に関する研究や教育を行うセンターとして、多大な業績を挙げてきました。

現在センターには、２名の専任所員と26名の兼担所員、８名の事務スタッフが所属し、福沢と近代日本研究の世界的な拠点として、実り多い研究を続けています。また、1984年度に創刊された『近代日本研究』の編纂、三田、日吉等のキャンパスでの福沢研究センター講座開講、出版や展示、貴重な資料の蓄積と整理、塾内外からのたくさんの問い合わせへの回答等に至るまで、きわめて多様な活動を進めています。

とりわけ今年は、慶應義塾創立150年の節目の年にもあたります。創立150年記念事業の一環として『写真集慶應義塾150年』、またセンター所員編纂による『慶應義塾史事典』の出版が準備されています。創立150年を記念して長い年月をかけて全19巻に及ぶ『慶應義塾150年史資料集』の編纂も行われていく予定です。また、福沢の著作の新しい英訳版についても準備が進んでいます。こうしたこと一つひとつが、センター所属教職員の力なしには到底進められません。そうした意味においても福沢研究センターは、25年の歴史を経て、慶應義塾の未来にとってきわめて大切な位置を占めるセンターに成長しております。

福沢諭吉によって慶應義塾が創られた1858（安政５）年は明治維新の10年前にあたりますが、その当時から150年をかけて、日本は封建制度から近代国家への変貌を遂げてきました。しかし今日本は、世界の多極化とグローバリズムの潮流のもとで、あらためてその姿を問われています。特にこれからの時代には、世界のどこにあっても自分で考え行動し、自分の言葉で語り、自分に責任を持って他者と協力しあうことのできる人間が求められます。ところが、150年にわたって近代市民社会確立への努力がなされてきたにもかかわらず、独立した個人の協力によって公共を創造する力が日本に本当に育ってきたといえるでしょうか。福沢諭吉の思想が昨今あらためて多くの人々によって語られるようになっているのは、この疑問が多くの国民の心の底に浮かんできたからだと思います。

こうした点に鑑み、これからの福沢研究センターには、次のようなことを期待しております。

第一に、福沢諭吉の思想と業績、およびそれに関わる近代日本の研究を、国際的な研究水準でさらに蓄積し続けていただきたいということです。その努力に値する果実は、慶應義塾だけでなく、世界中の人々が享受できるものになるでありましょう。また、高度な研究水準のもとで教育を受け、将来世界的な研究者に育つ人たちもさらに出てくるでありましょう。

第二に、これからのセンターには、福沢諭吉の思想と近代日本の研究がこれからの時代に投げかける意義についても、さらに多くの論を彫琢していただきたいと願っております。この第二の点は、第一の点への尽力なしには糸の切れた凧のように軽くなってしまうでしょう。そのことを踏まえたうえで、福沢の示唆した如くもし学問が実学たらんとするのであれば、福沢諭吉の思想の現代的意義についても視野に入れていくことも必要なのではないかと思っております。

第三に、福沢研究センターの活動を、日本語のみならず外国語でも塾内外にさらに発信する必要があるのではないかと思います。センターの活動内容は、世界中の人々がもっと深く理解すべき多くの事柄を含んでいるからです。すでにセンターでは福沢の著作の外国語での出版活動に尽力されていますが、世界に通じる言語によって福沢研究センターが世界にあまねく知られていくことは、日本近代化の過程が世界に知られていくことに繋がりますから、世界各国の人々のためにたいへん重要だと考えております。

いくつかの期待を申しましたが、これらの期待は、福沢研究センターが今後ますます、義塾のみならず、日本のみならず、世界に誇る近代日本に関する研究と教育の拠点として発展することを念頭に置いての期待であります。

センターの現教職員体制では、今実践すべき活動を行うだけでも精いっぱいであり、上に挙げた期待を実現しようと思えばなかなかの困難が伴うことは、疑いを入れません。しかし、開設以来25年を経た福沢研究センターが、次の時代に向けて成長を続け、ここに挙げた期待を含め、多くの方々の期待、そしてセンター教職員の方々の夢を実現することを通して、世界に冠たる研究教育センターとして確固たる地位を占めることを願ってやみません。

福沢諭吉の思想と業績、それらが関わった日本近代化の過程が、日本だけでなく世界中の人々に十分理解されるべき時代が、今またやってきています。あらためて、福沢研究センターの開設から今日までセンターの活動にご尽力いただいた皆様、センターの発展をご指導ご支援いただいた方々に深く感謝を申し上げますとともに、センターの新たな発展を心より祈念致しております。

所長就任にあたって

米山光儀（よねやま みつのり）
（福沢研究センター所長・教職課程センター教授）

経済学部の小室正紀教授の後を受けて、10月１日より福沢研究センターの所長に就任することになった。私は教職課程センターに所属しているが、その実際の開設は福沢研究センターと同じ1983年であり、両者とも「センター」という名称であることから、福沢研究センターの動向には関心を持ってきた。ここでは、体験的に福沢研究センターの歴史を振り返り、これからの課題について考えてみたい。

福沢研究センターは、1951年に『慶應義塾百年史』の編纂を目的として開設された塾史編纂所、さらに『百年史』刊行後、それを引き継ぐ形で1969年に設置された塾史資料室を前身としている。そのような組織が既にあったにも拘わらず、福沢研究センターという新しい組織が創られたのである。塾史編纂所時代については経験がないのでわからないが、少なくとも塾史資料室時代は慶應義塾に関わる資料の蒐集・保管という大切な仕事をしているにも拘わらず、設置の場所も転々とさせられ、言葉は適切ではないかもしれないが、細々と活動をしているという印象であった。それが慶應義塾創立125年記念事業のひとつとして、重要文化財である図書館旧館に位置し、慶應義塾の創設者である福沢の名を冠したセンターになってからは、端から見る限り、周縁的な存在から「センター」へと転換したように思えた。福沢研究センターは、「福沢諭吉の思想、業績の研究ならびにその普及に努めると共に、慶應義塾の歴史および塾員の活動、業績に関する調査・研究ならびに資料の収集活動ならびに近代日本の研究および教育を行うことを目的とする」（福沢研究センター規程第１条）と、これまでの資料蒐集・保管にとどまらない、研究・教育機関として、塾内外の多様な人々が関わる組織へと変化していったのである。その変化は、私が関わるようになる80年代の終わり頃にも実感できた。

私が福沢研究センターに関わるようになったのは、当時の副所長・法学部の内山秀夫教授に福沢研究センターの刊行物について尋ねたことが契機となり、所員となったことにはじまる。当時の福沢研究センターは研究会も多く、そこには著書・論文をよく読んではいても、専門分野が異なるために知り合いになる機会がない人々も来ていて、その人たちの謦咳に接することができたことは今考えても幸いなことであった。研究会のテーマは、福沢諭吉や慶應義塾に直接関わるものばかりでなく、広く近代日本に関するものもあり、福沢研究センターは近代日本を様々な角度から研究する人々が集い、交流する「センター」であることが実感された。まさに、福沢研究センターの英文名称である Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies に相応しい活動が実践されようとしていた。

しかし、福沢研究センターは、近代日本研究だけをしていればよいわけではなく、慶應義塾に関わるさまざまな周年事業に関与せざるをえない組織でもある。それは、一般の人たちに、福沢研究センターは周年事業のために開設されたと考えられてしまうのではないかと心配するほどの関わりである。福沢諭吉生誕150年、没後100年など、そして今は慶應義塾創立150年記念事業に追われている。周年事業への関与そのものは決してマイナスではなく、それを契機に福沢や慶應義塾史関連の新史料の収集が行われるなど、成果もある。しかし、周年事業そのものは、どうしても顕彰的な要素が強くなる傾向がある。福沢研究センターは、福沢の顕彰をしようとするものではなく、福沢や慶應義塾をひとつのキーワードとして近代日本研究を行おうとしているのであり、周年事業への関与によって「内向き」になってしまうことは避けられなければならない。また、周年事業への関与と日常業務の両立も容易ではない。福沢研究センターの日常業務は、規程にあるように多様であり、研究機関・教育機関・アーカイヴ・ミュージアムなど、いくつもの役割が期待されている。実際に福沢研究センターは、研究はもちろんのこと、公開講演会などの教育活動も行い、アーカイヴとしての役割、一部ではミュージアムの役割も担ってきた。しかし、アーカイヴやミュージアムとしての役割を本格化するためには、現在の施設はあまりに狭隘である。

そのような課題を抱えながらも、小室前所長の時に、いくつかのことは前進した。専任所員の配置、学部や大学院の学生を対象とした福沢研究センター講座の設置、一過性の周年事業を越えて、これから20余年を費やしての『慶應義塾150年史資料集』の編纂・刊行、そのための調査員の配置などである。

今、福沢研究センターでは、机が足りないほどに多くの人が集い、それぞれの仕事をしている。周年事業への対応、日常業務の整理など課題は様々にあるが、専任所員・所員・客員所員・調査員も含め、福沢や慶應義塾史の研究成果を踏まえて、自由・闊達に近代日本研究を行っていくことが、福沢研究センターの最も大きな課題であるようにも思える。その意味では、英文名称のように日本語の名称を変更することも視野に入れて、25年前の開設の理念を大切にしていくことこそが求められているのである。

2008年５月30日、三田キャンパス北館ホールにおいて、３名の講師をお招きしてセンター開設25年記念講演会が開催された。

福沢諭吉の近代化構想

── 天皇・議会・内閣・地方制度を中心に ──

寺崎　修（てらさき　おさむ）

講演中の寺崎 修氏

≪講師略歴≫
武蔵野大学学長。慶應義塾大学名誉教授。専門は日本政治史・日本政治思想史。駒沢大学法学部教授、慶應義塾大学法学部教授を経て現職。この間、慶應義塾福沢研究センター副所長、社団法人福沢諭吉協会常務理事、武蔵野女子学院理事、日本政治学会理事、日本法政学会理事などを歴任。主な編著に『福沢諭吉書簡集』（共編、岩波書店）、『近代日本の政治』（編著、法律文化社）、『自由民権運動の研究』（慶應義塾大学出版会）など。

福沢諭吉の政治近代化構想、具体的にいえば 天皇制、議会制度、内閣制度、地方制度など、新たに導入すべき諸制度について、福沢はどのような構想を抱いていたのか。一体彼はいかなる将来像を描いていたのでしょうか。

明治十四年政変後、反政府的な自由党や立憲改進党が結成されたのに対抗して福地源一郎らが帝政党を結成し、盛んに皇室のことを取り上げて他党を論難していることに危惧の念を抱いた福沢は、帝室（皇室）の政治利用を批判する『帝室論』（明治十五年）を執筆しますが、これには福沢の天皇制論ともいうべきものが明快に述べられています。福沢は、帝政党が尊皇主義を看板に掲げ、他の民権政党を賊臣のごとく非難中傷するのは、帝室を政争の具にするものであり、かえって帝室の尊厳を傷つけるものであると指摘、帝室はあくまで政治社外のものであり、学問教育の振興、日本固有の芸術の保護など、国民の福祉、文化的事業の中核となって、国民統合の役割を果たすべきものであると主張しました。福沢の主張は、帝室を軽視するものとして各方面から批判されましたが、戦後、新憲法が制定されると一転して再評価され、皇太子の教育にあたった小泉信三はこの本を教科書として使用し若き皇太子と輪読したことが伝えられています。

次に、国会論（議会論）ですが、福沢の国会論は自由民権運動家たちの国会論に較べると一見穏健なようにみえます。たとえば植木枝盛の「日本国国憲案」は、一院制の議会を前提に「聯邦議員ハ聯邦人民之ヲ直選ス」と定め、人民が完全支配する立法府の実現をめざしていたのに対し、福沢はイギリス流の上下両院制度をモデルとする二院制の採用を考えており、けっして特権的な上院の存在を否定しようとはしなかったからです。

しかし、植木ら自由民権派の主張は、立法府における人民の完全支配に意欲を燃やす一方で、行政権については「日本皇帝ニ属ス」との立場で、意外にも行政府の一角を担おうとする意思は全くありませんでした。立法府さえ押さえておけば行政府はこれに従わざるをえず、わが国に民主主義が到来するという甘い観測が根底にあったといわざるをえませんが、この点、福沢は『民情一新』（明治十二年）のなかで、議会の多数党が内閣を組織する議院内閣制を提唱し、二大政党による政権交代の必要性を力説しました。福沢の構想は選挙の結果次第で国会の権限も内閣の権限も同時に獲得・喪失する制度であり、政権の座に長く居座ろうとする者にとっては、危険きわまりないものでした。官僚の井上毅や三島通庸が自由民権派よりも福沢を最も危険な人物として敵視し続けたのはこのためです。

また、福沢はかなり早い段階から地方分権を提唱しました。明治十年に出版した『分権論』では、立法・外交・軍事・租税など国家中枢の権限は中央政府が、道路・学校・警察・保健衛生など一般人民に関わる権限については地方が掌握すべきであると主張しました。しかも「分権の議論あれば分財の議論も亦なかるべからず」と述べ、分権と分財は車の両輪であることを指摘するなど、今から一三〇年前の議論とはとうてい思えない議論を展開しています。

しかし、このような福沢の提言は、彼の生前中には何一つ実現しませんでした。「政治社外」に立つ天皇制やイギリス流の議院内閣制は、太平洋戦争後に制定された日本国憲法によってようやく実現し、二大政党による政権交代や地方分権に至っては、いつになったら実現するのか。未だに暗中模索の状況が続いているのです。

福沢諭吉のアレゴリー的思考

松浦寿輝（まつうら ひさき）

講演中の松浦 寿輝氏

≪講師略歴≫
東京大学大学院総合文化研究科教授。専門は表象文化論。フランス文学者、詩人、小説家、映画批評家。詩集『冬の本』（青土社 高見順賞）、『折口信夫論』（太田出版 三島由紀夫賞）、『エッフェル塔試論』（筑摩書房 吉田秀和賞）、『ゴダール』、『表象と倒錯：エティエンヌ＝ジュール・マレー』（筑摩書房）、『花腐し』（講談社 芥川賞）、『半島』（文藝春秋 読売文学賞）、『官能の哲学』（岩波書店）、『方法叙説』（講談社）など著書多数。

福沢諭吉及び広い意味での明治期の言説への私の関心には、二つの側面がある。19世紀後半の西欧文化史を専攻してきた者として、同時代の日本において西欧的な「近代性」の生成がどのような形をとったのかという問題には、当然深い興味を持たざるをえない。また、その「近代性」の諸相が、21世紀初頭の現在、すでに耐用年数を過ぎ、われわれは今「ポストモダン」とも呼ばれよう異種の歴史段階に入りつつあるのかもしれない。それはつまり、福沢の言説とともに開かれた日本の「近代」とはいかなるものであったかを、起源から終焉に至るまで総体として把握しうる時期が訪れたということだ。こうした二つのモチーフから私は今、『明治の表象空間』の分析を進めている（『新潮』連載中）。

福沢の著述活動を通観し、その「表象」的特質をどう捉えるかを考えるとき、「アレゴリー（寓喩）」という概念が有効なのではないだろうか。「アレゴリカー」としての福沢諭吉。まだ理論的な精練を経ているわけではないこの仮説の要点を、以下に簡単に素描してみたい。

「アレゴリー」はドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミンがその主著『ドイツ悲劇の根源』で基軸に据えた概念である。彼は17－18世紀のバロック期にドイツで書かれた戯曲の基盤を、ギリシャ悲劇と対比しつつ、「アレゴリー」の美学に見た。「意味するもの」と「意味されるもの」との自然で有機的な結合によって成立するのが「象徴」であるのに対して、「アレゴリー」とは、決まりきった約束事のシステムの内部で機能する比喩のことである。近代美学においては「象徴」が価値化されるが、ベンヤミンは「アレゴリー」の生産的なダイナミズムを復権させようと試みた。

巧みな比喩を駆使する福沢諭吉のレトリックの才がめざましいものであることは周知の通りであるが、そこには大まかに言って三つの水準があるように思われる。まず、論旨を明瞭にするための「卓抜な比喩」という水準がある。これは文意の理解を助けるための手立てとしての比喩といういわば平凡な水準であるが、しかし、そうした平凡な比喩が文体のリズムに乗って自動運動を起こし、「意味するもの」と「意味されるもの」との均衡を崩しつつどんどんイメージを増殖させてゆくような場合がある。その最良の例は『学問のすゝめ』第十四編「心事の棚卸」に見出されるだろう。さらに、第三段階として、その自動運動が一つの「物語」をかたちづくるところまで至り着くような場合がある。同書第七編「国民の職分を論ず」に出てくるいわゆる「楠公権助論」がその一例であろう。

こうした福沢のレトリックは、近代美学の「象徴」ではなく、コンヴェンションの体系として成立している文化的記憶の中から取り出されてきたフィギュールであり、「象徴」というよりやはり「アレゴリー」と呼ぶべきものだろう。ベンヤミンの提起した意味での「アレゴリー」の意味論的活力を十全に活用するところから、福沢の文体のあの力強さが生まれたと言えるのではないか。

明治日本の言説空間は、帝国憲法が制定されたあたりから、「アレゴリー」ではなくむしろ「象徴」の時代に入っていった。明治中期以降、万世一系の皇室を中心に据えた立憲君主国家の体裁が整えられてゆくわけだが、「天皇」というフィクションそれ自体、アレゴリカルというよりはむしろシンボリックな価値概念と呼ぶべきものであろう。啓蒙主義者福沢は軽やかな「アレゴリー」の運動によっていわば「象徴」の体系を批判した。しかし、啓蒙的言説の無力化とともに、ふたたび重苦しい「象徴」が復活し、それが日本を最終的には敗戦の悲劇へ導いていったように思われる。

福沢諭吉と人倫の思想

猪木武徳（いのき たけのり）

講演中の猪木 武徳氏

≪講師略歴≫
米国 MIT 博士課程終了、大阪大学経済学部教授を経て国際日本文化研究センター所長。日本学術会議会員。2007 ～ 2008年まで日本経済学会会長。専門は労働経済学、経済思想、日本経済論。著書に『経済思想』『新しい産業社会の条件：競争・強調・産業民主主義』（岩波書店）、『経済成長の果実1955－1972（日本の近代；7）』（中央公論新社）、『文芸にあらわれた日本の近代：社会科学と文学のあいだ』（有斐閣）など多数。

福沢諭吉が古今和漢の道徳論に不満を持ったのは、私徳・公徳の区別が無いこと、その優先順序を論じないことにあった（『日本男子論』）。この点に注目しながら、福沢の描いた「公」と「私」の重層構造を取り上げ、彼の倫理思想の社会的な側面を3点に分けて検討してみたい。

まず第一に、福沢の徳義論は、アリストテレスの「中庸」の思想とほぼ同じものと考えられる。徳は、（たとえば「勇気」が無謀と臆病の中間にあるように）過剰と過少の中間にあるという考えである。このことは『学問のすすめ』第13編「怨望の人間に害あるを論ず」の徳・不徳の相対性の議論にも現れている。福沢の「公徳」の重視は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』における「国という共同体の幸福」に貢献する徳、そして「自己に向けられた」徳ではなく、「対他的な」徳を重視する考えと同じである。さらに、内発性のない徳行がいかに不確かなものか（「名分をもって偽君子を生ずるの論」）、そしてモラルは智（インテレクト）とは違って、試験をしても意味がない、という福沢のコメントにも注目したい。

第二に、福沢は『文明論之概略』第6章「智徳の弁」において、モラルとインテレクトに「公」と「私」のふたつの面があることを指摘し、私徳、公徳、私智、公智の四つに分類し、従来の日本社会の「私徳の偏重」を批判する。ここで、福沢は、当時の日本の文明の進歩にとっては、徳より智、私徳より公徳、私智より公智という順序づけを示す。

第三に、この「公」に対する「私」の優先という福沢の考えを検討する。『痩我慢の説』冒頭の「立国は私なり、公に非ざるなり」という言葉は、彼の考えた「公」と「私」の重層構造を示している。たとえば、「藩」という団体内部での自分は「公」の立場を持つが、「藩」の外に対するときの自分は、私情を持つ「私」であるという構造である。『丁丑公論』で論じられる「抵抗の精神」も「公」という理念を意識した「抵抗」なのである。その視点からシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』を読むと面白い。この悲劇は一般には、友情と権力の相克の物語として読まれる。そして聖者のごとき廉潔さと暗殺者の非道さがブルータスの中に共存している点が強調される。しかしこの物語は、友情自体が、「公智」による政治家の結合という側面を持っていたことを示す、と見るべきであろう。「公智」こそ、共和政治における最も重要な精神的な構えなのである。

記念講演会の会場風景（北館ホール）

『文明論之概略 第九章』の草稿を調べる

進藤咲子（しんどう さきこ）
（東京女子大学名誉教授・福沢研究センター客員所員）

『文明論之概略第九章』の草稿は一冊しか残存しない。散佚したのでもなく紛失したのでもない。この草稿が最初の草稿であり、完結した最終稿なのである。そのためか修正のための貼り紙も比較的多い。

この草稿は基本的には一行50字前後の細字で認められている。これは速筆の福沢がもっとも筆を走らせやすい字詰だったのではないか。草稿が第八章、第十章、第九章の順に書かれていることは、草稿下部に記録された日付けによって、先達の中井信彦・戸沢行夫両氏が明らかにしていられる。この草稿は第七章同様、厚手半截紙が挟まれており、これは書き終った草稿をかんぜよりで綴じる際に、芯として入れて補強したと思われる（現在この補強紙はない）。

第九章は福沢独自の史観を展開したもので、上古から今日までの日本の人間交際は治者流と被治者流の二様しかなく、治者側に権力が集中し偏重である。被治者は変わることなく支配され続け今日に至りきわめて偏軽で、つまりアンバランスなのだ。日本とヨーロッパとの違いは後者の人民一般が活発で、とくに近世以降は中等人民が勢力を得てきたことだ。最後に葛山伯有の田制沿革考を引き経済論を展開している。日本の国の通史の記述には主として新井白石の『読史余論』をハンドブックに用いている。書中の九変、五変ということばもそのまま用いている。草稿には次の記述がある。

> 新井氏が天下ノ大勢九変又五変ト云ヒシハ即チ此芝居ヲ九度ヒ催フシ又五度ヒ催フシタル丁ノミ或ル西人ノ著書ニ亜細亜州ノ諸国ニモ変革騒乱アルハ欧羅巴ニ異ナラズト雖トモ其変乱ノタメニ国ノ文明ヲ進メタルコトナシトノ説アリ（※岩波文庫218 14）この一節は、政府ハ新旧交代スレトモ国勢ハ変スルコトナシで括られている。下線は書き替えて西人の著書を引用した。

※福沢諭吉著松沢弘陽校注『文明論之概略』岩波文庫。数字は左が頁、右は行を示す。以下同様に示す。

類義語内の書き替えは次のものが見られた。

1、十分一ノ銅ヲ混合スルモ（混和を混合に直す。208 3）
2、人民ノ富テ強キ者（百姓を人民に直す。215 6）
3、当時ノ名僧智識モ天朝ノ官位ヲ身ニ附ケ其位ヲ以テ朝廷ノ群臣ト上下ノ A 班ヲ争ヒ B 一席ノ内外ヲ以テ栄辱ト為シタルコトナラン（A は席を班に直す。B は鋪居一筋を一席に直す。224 13）
4、東西ノ学風其趣ヲ異ニシテ西洋諸国ハ実験ノ説ヲ主トシテ（実学を実験ノ説に直す。228 6）
5、之ヲ発明シ之ヲ改革シテ（発見を発明シに直す。231 13）
6、初メヨリ先生ニハ及バヌモノト（カラをヨリに直す。232 10）
7、御殿ニテ起居動作ハ自カラ清雅ニ倣ヒ（宮中を御殿に直す。233 15）

文字のゆれ

必ス片重片軽、一ヲ以テ他ヲ滅シ（最初は片重片軽、これを偏重偏軽に直し、さらに片重片軽とした。第九章は一般に偏を用いるが、福沢に片と偏のゆれがあったと思われる。208 1）

送りがなのゆれ

皆政府ノ力ニ依ラザルモノナシ（依サルのサルを消し、依ラと送りがなを送った。225 4）

こういった小さな直しもやがて文体確立のための資料になると考える。

もっとも大きな修正は「都テ世ノ事物ニハ初歩ト次歩トノ区別アルモノニテ」（242 16）から「啻ニ貧士貧民ノミナラズ学者モ亦然リ商人モ亦然リ概シテ之ヲ評スレバ」（245 6）までである。版本によれば61行文の大修正である。この箇所は新たに挿入されたと思われる。ここの最初の部分については文庫本校訂者の松沢弘陽氏からは、J・S・ミル『代議政治論』第二章の終りに近い部分と趣旨がよく似ている旨の指摘がある。福沢が偏重偏軽の記述をぐんぐん進めてきたなかで、突如、都テ世ノ事物ニハ初歩ト次歩トノ区別アルモノニテとくると、何か異質の感が否めない。大きな修正については、第九章の文章の全体の流れの中で改めて考えてみたい。

（本稿は2007年11月17日に行われた第３回福沢研究センターセミナーの概要である。）

福沢研究センター開設25年記念

◇秋学期　拡大ワークショップ　「近代日本と慶應義塾」
12月５日（金）午前10時30分～　研究室棟Ａ会議室（予定）
＊詳細はホームページでお知らせいたします。

「生誕 120 年記念小泉信三展」を振り返って

都倉武之（とくら たけゆき）
（福沢研究センター専任講師）

慶應義塾長を務めた小泉信三（1888-1966）の生誕120年を記念する展覧会が５月８日から２週間の日程で図書館旧館２階大会議室において開催された。当初は没後40年を記念して一昨年企画されたが、予算や準備の都合により、生誕120年記念として本年開催の運びとなったものである。

展示資料の中心となったのは小泉家から慶應義塾に寄贈され、当センターが所蔵する小泉信三関係資料である。これは平成16年11月以来、小泉信三二女・妙氏がご寄贈下さった資料を主とするもので、まだ整理は完了していないが、寄贈のお披露目の意味も兼ねた展覧会となった。またその他にも多くの関係者・機関にご協力を仰ぎ、快く資料をご提供頂いた。

展示の構成と概要

展示は時系列に７章立てとし、以下のように内容を整理した。

○１章　父の影像　―生い立ち―　幼い時に早逝した父信吉（のぶきち）と、主なき小泉一家を庇護した父の師の福沢諭吉という、小泉に大きな影響を与えた２人との触れ合いを中心に、幼少期の資料を展示。

○２章　よく遊びよく学ぶ　―塾生時代―　普通部生時代から体育会庭球部の大将として活躍し、大学に進むと学問、そして文学・演劇に目覚めた小泉の姿を取り上げた。

○３章　常に学生と共に在る　―教授時代―　恩師福田徳三に「麒麟児」と言わしめた経済学者としての活躍、また庭球部長として、塾生やスポーツを愛した姿を展示した。

○４章　善を行うに勇なれ　―塾長時代―　日吉キャンパス開設、藤原工業大学開設等、義塾の新時代を拓くと共に、戦時中の最も困難な時期の義塾を支えた塾長在任時代を描いた。

○５章　勇気ある自由人　―戦後―　時流に阿らない執筆で日本の行方を定め、東宮御教育参与として今上天皇のご教育に携わった姿を、幅広い交友と共に展示した。

○６章　愛の人　―良き家族―　ユーモアを愛した家庭での愉しい団欒の雰囲気や、長男信吉（しんきち）の戦死という大きな試練を通した、家庭人としての小泉の姿を描いた。

○７章　終焉と継承　福沢精神の継承と福沢研究の発展に心を尽くした生涯と、小泉亡き後の、福沢精神、小泉精神の継承を示した。

このほかに、書斎復元を試みたほか、会場数カ所に音声資料を流し、映像コーナーとして、小泉の音声をテロップ付きで流したものは、大変好評であった。

当初は、壁沿いに展示ケースを設ける予定であったが、既存の机を有効利用するため展示ケースの台として利用したこと、展示資料が増えたことなどから、各章ごとに「島」を作って配置した。結果的には大変見易いとの声が多く聞かれた。

なお、会期半ばには、小泉妙氏より追加のご寄贈があり、その中には皇太子時代の今上天皇へのご進講に関するメモなど貴重なものも含まれていたため、特別出品として追加展示した。

開催の反響

会期中、総計１万2000人の来場があった。80代を超える古老塾員の方々が多くご来場下さっただけでなく、折からの昭和30年代ブームもあって、戦後世代の塾内外の人々に幅広く関心を集めたことによるようである。16日の天皇皇后両陛下の行幸啓はじめ、新聞雑誌、テレビでも報道される機会を得たことも幸いした。当初学生の姿がほとんど見られず心配されたが、会期後半では、多く見られるようになった。

来場者には出陳資料リストと共にアンケートを配布、その数千通に及ぶ回答は、センターで保管している。図録3000部は、最終日の午後に完売となった。

普段はなかなか入る機会のない図書館旧館、それもステンドグラスを見ながら大階段を上り、あの大会議室で開催した、ということも大変意味のあることだったようである。

成果と課題

今回の展覧会の企画運営は、ほとんど数名のボランティアによってなされたといってよい。それは、当センター所員山内慶太氏、幼稚舎教諭神吉創二氏、広報室渡部淳氏、及び筆者の４名である。また図録は、これに加え、大学出版会の及川健治氏、野田桜子氏の献身的な努力によって完成したものである。塾内外の広報などは、組織的にではなく文字通り自転車操業という状態であった。資料の陳列については、150年記念展覧会事務局の平塚泰三氏、福士理氏の助力が大きく、その他アートセンターにも展示に当たって何かとご指導を仰いだ。このような企画運営の実体は慶應義塾主催、150年記念事業の一つという位置づけと、齟齬があった印象は否めない。そのしわ寄せが、他の福沢研究センターのなすべき150年関連の事業に及ばぬよう、終了後さらなる負担がのし掛かる事態となった。

しかしながら、同時にこの展覧会は、大学構内で行われるものとしては、異例の成功を収めたといってよいだろう。直接謦咳に接した者も少なくなった小泉信三という人物について、福沢諭吉について、あるいは義塾の理念について、塾内外に再認識を促す契機となり得たように思う。

また外部借用・展示の経験は、来年早々に開催予定の福沢諭吉展の準備や、今後センター所蔵資料を様々な形で活用していく上でも大いに参考となった。福沢研究センターの実質的主催により一つの展覧会が成功したこと、また、150年事業の中でも塾内外に深い印象を残すイベントを独力でなし得たことは、大いに誇るべきことと自負している。

＊ 山口良蔵宛福沢諭吉書簡（続き）＊

宛先の山口良蔵は大阪の出身で父は蘭方医、福沢諭吉とは大阪にあった緒方洪庵の適塾で知り合い、親交を結びました。経歴は不明な点も多いのですが、明治維新後は兵部省に出仕し、明治10（1877）年ごろまでは軍医として勤務したようです。翻書に『船用汽機全書』（全５冊、明治10～16年。海軍兵学校・海軍機関学校・海軍造船所刊行）があります。またこの長文の書簡の前半部分には、版権（「コピライト」）の確立に努力を重ねる福沢が、偽版に悩まされる様子も綴られています。

■ 小泉信三展開催

2008年５月８日から21日まで２週間にわたり、三田キャンパス図書館旧館大会議室において、小泉信三の生誕120年を記念して「小泉信三展」が開催された。企画は同展実行委員会であり、福澤研究センターと経済学部が協力する形ですすめられたが、実質上は福澤研究センター所員が、アート・センターの協力を得つつ、展示・カタログ双方につき担当した。予想を超える12000人余りの来場者があり、用意したカタログ3000部に不足がでる状態であった。また、会期中の５月16日には、両陛下も御来臨になり、予定時間をこえて御覧になられた。

■ 開設25年記念講演会・記念パーティー

1983年に開設された福沢研究センターは、今年開設25年を迎えた。これを記念して、５月30日に三田キャンパス北館ホールにて、第一線の研究者三名による記念講演会が、189名の聴講者を集めて開催された。講演者は政治史、文学、経済思想、それぞれの視角から福沢諭吉にスポットライトをあてて、興味深い福沢像を浮かびあがらせた。講演の概要については、本号に掲載されている。

講演会終了後、北館ファカルティークラブにて、開設25年記念パーティーも開催され、多数の関係者が出席し25年の来し方と今後のセンターにつき、興味深いスピーチが相次いだ。

■『近代日本研究』第24巻刊行

３月31日付けで『近代日本研究』第24巻が、刊行された。この巻は、「特集　慶應義塾創立百五十年・慶應義塾福沢研究センター開設二十五年」と題して、特集論文７本を収めている。なお、本年は、義塾、センター双方にとって記念すべき年にあたることから、１年間に２巻を刊行する計画であり、10月31日の刊行を目指して第25巻の編集がすすんでいる。

■『慶應義塾史事典』編集、校了へ

創立150年記念誌として４年間の歳月をかけて編集が進められてきた『慶應義塾史事典』は、いよいよ９月末日を目途に校了となる。この『事典』は、収録項目数1097、収録画像850点、執筆者338人、総頁967頁のボリュウムを持つもので、慶應義塾150年の歴史を、時の流れに従って読むことも、組織別に調べることも、必要に応じて興味のある項目のみを繙くこともできるように編集されている。読者が、それぞれの目的や関心に応じて、義塾の150年を振り返ることが出来る事典である。

ここまでに、開催された編集委員会は31回をかぞえ、それ以外に合宿作業も再々行われたが、とりわけ終盤の今春以降は、編集委員が連日、早朝から深夜まで福沢研究センターあるいは慶應義塾大学出版会に缶詰状態で、完成度を高める作業をつづけ校了の目処がついた。慶應義塾大学出版会からの納品は10月末日の予定。

■『1943年晩秋 最後の早慶戦』共編

昭和18年10月、戸塚球場で行われた出陣学徒壮行早慶野球試合は、出征を前にした悲壮感と若者達の野球への情熱が織りなした試合として余りにも有名で、この夏には「ラストゲーム　最後の早慶戦」のタイトルで二度目の映画化も行われた。標記の出版は、2005年に早稲田大学大学史資料センターが開催した展覧会「1943年晩秋最後の早慶戦」をきっかけとして始まった企画。出版は教育評論社で、早稲田大学大学史資料センターと福沢研究センターが共同で編集した。

いまだに人々の関心をひく有名な試合だけに、それにからんで、時にセンセーショナルに「新事実」発見などが報道されることがある。しかし、戦時中の非常に難しい時期であり、関係者それぞれが互いの立場を思いやり発言を控えていた場合も多々あり、事実の確認には慎重な研究がともなわなければならない。この点、早慶双方の編者は、時には論争と見られかねない熱の入った議論と検討を重ねながら、「事実」を表現するに適切な文言をえらび、本書を編集した。

■ 新所長の就任

６月の運営委員会において、９月30日の任期満了をもって現小室正紀所長が退任し、10月１日より、新たにこれまで副所長を務めてきた米山光儀君が所長に就任することが決まった。小室所長は、坂井達朗前所長が選択定年で退かれた後、平成15年10月より前所長の残任期間を含め、２期半５年にわたり所長を務めた。米山新所長は教職課程センター教授･同センター副所長であるが、同職を兼担しつつ、いよいよ山を迎える150年記念諸事業に関して福沢研究センターを主導する。

■ 諸会議
＊平成19年度第３回運営委員会（３月10日）
＊平成20年度第１回運営委員会（６月26日）
＊平成20年度第１回センター会議（５月23日）
＊第２回小泉信三展実行委員会（３月14日）
＊大阪小拠点設立検討ワーキンググループ会議
３月19日、４月25日
＊『慶應義塾史事典』編纂委員会
第４回合宿・第29回編纂委員会
（３月24～26日：クロスウェーブ東中野）
第30回（５月１日）、第31回（７月24日）
＊創立150年記念誌刊行委員会（４月17日）
＊創立150年記念事業幹事会（４月24日）
＊創立150年記念展覧会実行委員会
６月６日、８月６日
＊展覧会カタログ編集委員会
３月29日、４月26日、６月５日、７月４日、８月28日
＊創立150年記念講演会実行委員会（６月27日）
＊記念碑ワーキンググループ会議
３月13日、４月16日
＊ワークショップ（３月15日）
「文久期における「処士横議」と草莽―薩摩藩誠忠組激派と清河八郎の関係を通じて―」
報告者：長南伸治（福沢研究センター調査員）
「明治初年における木下助之の百姓代改正論について」
報告者：池田勇太氏（東京大学博士課程）
＊ワークショップ（７月12日）
「18世紀初頭幕府の堤川除普請政策と地域社会―下総国香取郡佐原村の公用留日記を素材として―」
報告者：田口英明氏（福沢研究センター調査員）
「麝香間祗候の歴史編纂事業」
報告者：刑部芳則氏（中央大学大学院）

■ 人事
〈所員〉
退職　寺崎　　修（副所長，法）～３月31日
新任　小川原正道（法）　　４月１日～
　　ボールハチェット，ヘレン（経）４月１日～
　　宮内　　環（経）　　４月１日～
　　末木　孝典（高）　　７月１日～
〈研究嘱託〉
退任　山根　秋乃　　～３月31日
新任　遠山　隆淑　　４月１日～
〈事務局〉
退職　佐藤　利加（派遣職員）～３月19日
　　神﨑　慧子（事務嘱託）～３月31日
　　田邉阿咲子（事務嘱託）～３月31日
新任　手取屋幸代（派遣職員）３月19日～
　　望月麻実子（事務嘱託）４月１日～
　　松崎　佳美（事務嘱託）４月１日～
　　杉原　　優（事務嘱託）６月１日～

■ 来往
＊宮城学院資料室山崎環氏、資料整理の方式を見学（３月５日）
＊塾員長須賀厚氏来訪（３月６日）
＊100三田会谷本明穂氏、佐藤清和氏来訪（３月７日）
＊筑波大学中野目徹氏ほか学生14名、展示室および演説館を見学（３月14日）
＊河村桃子氏来訪、祖父河村頴一氏（塾員）旧蔵資料を寄贈（３月21日）
＊東工大伊賀健二氏、肥田野登氏、岡田清氏、センターを見学（３月27日）
＊龍谷大学ミュージアム開設準備室宮治昭氏、入澤崇氏来訪（３月27日）
＊NHKエンタープライズ岩村明美氏、資料閲覧（３月28日）および資料撮影（４月２日）
＊塾員田中達彦氏、田中一貞関係資料を寄贈（４月２日、28日）
＊アブドーラ・モハンマド氏、翻訳の件で来訪（４月３日）
＊鎌倉三田会44名、展示室、演説館を見学（４月９日）
＊塾員近藤信義氏来訪、資料を寄贈（４月９日）
＊客員所員松沢弘陽氏、調査のため来訪（４月12日、６月27日、７月３日）
＊シカゴ大学王飛仙氏、調査のため来訪（４月14日）
＊渋沢栄一記念財団木村昌人氏来訪、資料閲覧（４月14、21日）
＊名誉教授浦昭二氏来訪、資料を寄贈（４月16日）
＊新潮社から小泉展の取材（４月18日）
＊産経新聞社から小泉展の取材（４月18、22日）
＊塾員河原田有一氏来訪、資料を寄贈（４月22日、５月20日）
＊宋恵敬氏、福沢展打合せのため来訪（４月24日）
＊三田倶楽部椎野開八郎氏来訪（４月25日）
＊鈴木千介氏来訪、資料を提供（４月30日）
＊102三田会横山氏来訪（５月１日）
＊港区立郷土資料館より小澤絵理子氏ほか１名、展示相談のため来訪（５月２日）
＊鎌倉三田会坂倉雅彦氏ほか３名来訪（５月７日）
＊朝日新聞田之畑仁氏、取材のため来訪（５月７日）
＊秩父宮記念スポーツ博物館伊藤敬氏来訪（５月７、22日）
＊大庭耿志氏来訪、資料に関する情報提供（５月13日）
＊ホッケー部OB宮内繁氏来訪、資料を寄贈（５月14、15日、６月10日）
＊扶桑社杉田淳氏および三田会関係者来訪（５月14日）
＊塾員宇田川武志氏来訪（５月15日）
＊塾員松井隆直氏来訪（５月16日）
＊早稲田大学大学史資料センター所長吉田準一氏ほか２名来訪（５月16日）
＊法政大学笹川孝一氏およびゼミ生の見学（５月16日）
＊元事務長中井芳雄氏来訪（５月19日）
＊TBSテレビ、小泉展取材のため来訪（５月19日）
＊三田ヨット倶楽部石橋國雄、木村捷一氏来訪（５月20日、６月４日）
＊日本テレビ、取材のため来訪（５月20日）
＊向野一氏ほか２名来訪、中津市内旧家所蔵資料の調査について相談（５月21日）
＊塾員武石賢氏来訪、資料を寄贈（５月21日）
＊体育会ヨット部OB鈴木眞一郎氏来訪、資料を寄贈（５月22日）
＊体育会ボクシング部OB北島勇氏来訪（５月22日）
＊講談社エディトリアル長岡氏来訪（５月30日）
＊台湾元智大学孫一明氏ほか10名、展示室見学（６月３日）
＊綱町三田会高野英男氏来訪、資料閲覧（６月３日、７月４日）
＊オーストラリア国立大学Rikki Kersten教授来訪（６月４日）
＊田島圭介氏来訪（６月６日）
＊文化庁文化財部美術学芸課松本純子氏、東京国立近代美術館フィルムセンター栩木章氏、調査のため来訪（６月６日）
＊韓国祥明大学教授朱鎮五氏来訪（６月９日）
＊鎌倉三田会岡林馨氏来訪、資料を寄贈（６月９日）
＊郵研三田会、連合三田会における展示の相談で来訪（６月11日、８月６日）
＊教育評論社久保木健治氏、小山香里氏来訪（６月11、20日）
＊TBSテレビ石川瑞紀氏来訪（６月12日）
＊産経新聞社顧問鈴木隆敏氏来訪（６月12日、７月４日）
＊森居幸平氏来訪、福沢資料について相談（６月13日）
＊甲南大学教授黒田忠志氏、資料閲覧（６月20日）
＊伊藤四郎氏、調査のため来訪（６月20日）
＊名誉教授白井厚氏来訪（６月20日、７月２日、８月19日）
＊塾員永峰真氏、松商学園理事長藤原一二氏、同理事高橋慈夫氏来訪（６月21日）
＊窪寺紘一氏（著述家）来訪、資料閲覧（６月24日）
＊韓国京畿文化財団洪仁國氏来訪、仁川に建設される実学博物館に資料提供（６月25日）
＊写真修復家白岩洋子氏来訪（７月14日、８月25日）

＊客員所員進藤咲子氏来訪、資料を閲覧（7月16日）
＊梨花女子大学長李培鎔氏ほか来訪（7月18日）
＊連合三田会大坪泰一郎氏、地図作成の件で来訪（7月18日）
＊憲政記念館古谷ゆかり氏ほか1名来訪（7月23日）
＊韓国翰林大学翰林科学院朴羊信氏来訪（7月23日）
＊塾員岸崎昌博氏来訪、資料を寄贈（7月23日）
＊テレビマンユニオン村井直道氏来訪、資料閲覧（7月25日）
＊静嘉堂文庫原徳三氏来訪、資料閲覧（7月28日）
＊塾員和田裕氏来訪、資料を寄贈（7月30日）
＊港区教員研修参加者18名、展示室を見学（7月31日）
＊応援指導部OB嶽肩俊彦氏、野口公二氏来訪、資料を寄贈（8月1日）
＊読売書法会松本晋氏、小幡静香氏来訪、資料を貸出（8月7日）
＊名誉教授海津忠雄氏来訪、資料閲覧（8月18日）
＊教育評論社小山香里氏、出版の件で来訪（8月25日）
＊大島博徳氏来訪、資料を寄贈（8月27日）
＊塾員石原渥男氏来訪、資料を寄贈（8月28日）

■ **出張・見学**

＊都倉講師、小泉展準備のため小泉家を訪問（3月2日）
＊都倉講師、小泉展準備のため塾員松尾俊治氏、山本俊彦氏を訪問（3月3日）
＊西沢准教授、米津昭子名誉教授宅へ資料返却（3月4日）
＊都倉講師、山内所員、小泉展準備のためテラダ倉庫（3月5日）
＊都倉講師、小泉展の資料借用のため岩波書店（3月12日）
＊西沢准教授、福沢記念館評議員会出席および記念館事業についての相談のため中津（3月27～28日）
＊西沢准教授、赤堀係主任、テラダ倉庫で資料搬出の準備作業（4月3日）
＊都倉講師、小泉展準備のため秩父宮記念スポーツ博物館（4月11日）
＊小室所長、西沢准教授、中津市と慶應義塾の協力協定調印式に出席（4月16日：図書館旧館記念室）
＊酒井事務長、ニチマイの志木工場見学（4月21日）
＊都倉講師、小泉展の資料借用のため河原一慶氏を訪問（4月24日）
＊都倉講師、小泉展の資料借用のため御田小学校、山本敏彦氏宅を訪問（4月25日）
＊都倉講師、小泉展の資料借用のため吉田茂国際基金（4月28日）
＊都倉講師、酒井事務長、小泉展の資料借用のため靖国神社遊就館（5月1日）
＊酒井事務長、大阪リバーサイド・キャンパス開設セレモニーに出席（5月3日）
＊小室所長、福沢旧邸保存会理事会に出席のため中津（5月21日）
＊都倉講師、赤堀係主任、小泉展の資料返却のため靖国神社遊就館、岩波書店、早稲田大学（5月23日）
＊都倉講師、小泉展の資料返却のため御田小学校（5月23日）、吉田茂国際基金、山本敏彦氏、肥田野淳氏（26日）、野田岩（27日）、京都大学（28～29日）、盛岡先人記念館（30日）、伊藤三郎氏訪問（6月2日）、丸山園（6月19日）
＊都倉講師、福沢展打合わせのため、北里研究所（6月26日）
＊都倉講師、資料受け取りのため河原一慶氏を訪問（7月4日）
＊都倉講師、福沢展資料借用のため幼稚舎（7月11日）
＊酒井事務長、ニチマイ第5回アーカイブレコーディングセミナーに参加（7月18日）
＊都倉講師、出版打合せおよびテレビ局取材を受けるため早大（7月19日）
＊都倉講師、福沢展の資料借用のため野球体育博物館（7月31日）
＊赤堀係主任、さいたま市にある脱酸プラントの会社を見学（8月1日）
＊都倉講師、福沢展打合せのため交詢社（8月1日）
＊西沢准教授、峰岸千栄子氏宅訪問、資料の寄贈を受ける（8月2日）
＊都倉講師ほか1名、福沢展の資料借用のため伊予吉田村井幼稚園（8月6日）
＊都倉講師、福沢展の資料借用のため上原清子氏宅訪問（8月8日）
＊西沢准教授、交詢社にて牧山圭男氏より資料借用（8月12日）
＊都倉講師、福沢展展示相談のため憲政資料室（8月12日）
＊西沢准教授、事典用の資料借用のため糸川満珠子氏宅訪問（8月21日）
＊西沢准教授、小林弘二氏宅を訪問、資料の寄贈を受ける（8月21日）
＊都倉講師、福沢展打合せのため宮内庁書陵部（8月27日）
＊都倉講師、資料返却のため長野県安曇野市（8月31日）

■ **講師派遣**

＊西沢准教授、中等部にて新入生に特別授業（4月10日）
＊小室所長、西沢准教授、通信教育部の放送授業開始50周年記念のための講義を収録（4月18日）
＊西沢准教授、三浦市にてシステムデザイン・マネジメント研究科新入生に講義（4月27日）
＊小室所長、湘南藤沢キャンパスにて「慶應義塾入門」の出張授業（6月13日）
＊小室所長、福沢文明塾の依頼により、三田にて「塾について」講演（6月14日）
＊小室所長、鎌倉三田会で講演（6月15日）
＊小川原正道所員（法学部准教授）、姫路慶應倶楽部で講演（6月28日）
＊通信教育部スクーリングでセンターの講義を実施（8月18日～25日）

■ **訃報**

元所長 内山秀夫名誉教授ご逝去（4月6日）

■ **その他**

＊センターの案内パンフレットを全面改訂（3月31日）
＊「生誕120年記念　小泉信三展」開催（5月8～21日）於：図書館旧館大会議室
＊教育評論社、早稲田大学大学史資料センターと『1943年 晩秋 最後の早慶戦』について出版契約（7月25日）

慶應義塾福沢研究センター通信　第9号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2008年10月1日　（年2回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田2－15－45
電　話　03－5427－1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所